



Title	路上観測学の系譜 : ストリート観測の歴史と変遷
Author(s)	渡辺, 明日香; 城, 一夫
Citation	デザイン理論. 2007, 51, p. 73-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51158
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

路上観測学の系譜 —— ストリート観測の歴史と変遷 ——

渡 辺 明日香 ・ 城 一 夫

共立女子短期大学／共立女子短期大学

キーワード

考現学, 路上観測学, ストリートファッション, 定点観測
Modernology, Street observation studies, Street-fashion,
Fixed-point observations

1. はじめに
2. 路上観測学の系譜
3. マーケティング的な視点によるストリートファッション観測の系譜
4. ストリートファッション考現学の現在
5. まとめ

1. はじめに

筆者らは1994年から今日までの14年間、毎月、東京都内の繁華街にて若者たちのファッションを写真撮影し、定量・定性的に調査分析を行っており、その結果の一部を1998年よりホームページに公開している¹。筆者らの行っているストリートファッション観測は、今和次郎、吉田謙吉らの考現学の領域に属するものと考えている。

考現学の始祖・今和次郎は「考現学とは何か」と題した文章で、「考古学と同じくそれは方法の学であり、そして対象とされるものは、現在、われわれが眼前に見るものであり、そうして窮めたいと思うものは人類の現在である」²と述べている。

今による考現学の提唱以来、現実の社会現象を知るための路上観測の試みが数多くなされてきたが、路上観測という手法を用いた風俗研究が、学問的に確立されているかという点、定かではないように思える。

「考現学」、「路上観測学」を研究対象とした既存研究としては、以下の4報がある。第1は井上忠司の「定点観測の方法——気象の科学から風俗の科学へ——」³（1977）である。井上は、明治初期の坪井正五郎の風俗測定から昭和前期の今和次郎・吉田謙吉による考現学に至る過程を取り上げ、その観測手法や風俗を科学的に解明する意義について記述している。第2は日本生活学会編「衣と風俗の一〇〇年」⁴（1995）であり、同書は近代100年間の衣服と風俗に関する研究成果をとりまとめた論考集であり、その一項目に、松平誠による「戦後服飾を中心とする風俗の変遷」がある。本研究は、必ずしも路上観測による言及ではないが、戦後の服飾デザ

インの流れを風俗の視点から記述したものである。第3は、現代風俗研究会編「風俗研究の方法」(2000)である。同書の「風俗を調べる——マニュアルをこえて、自分の方法をつくるために」⁵では、鵜飼正樹・永井良和により、路上観測の手法と重要性が詳述されている。第4は、池井望による「流行研究の方法」⁶であり、池井は、スペンサー、ウェブレン、ジンメルなどの西洋の古典流行論を紹介するとともに、わが国の流行論の一つとして坪井正五郎から今和次郎にいたる考現学を取り上げている。

上記はそれぞれ優れた考察であるが、1980年代以降、現在までの路上観測研究の変遷に関して記述がなされたものは皆無である。そこで本論では、明治20年から2007年までの約120年間にわたる路上観測の系譜をまとめるとともに、特に、1980年代以降、現在までの路上観測研究がどのような位置づけのもとに行われてきたかに焦点を当てて、その変遷と意義について検討したい。

2. 路上観測学の系譜

2-1. 坪井正五郎の風俗測定

明治初頭の日本は欧米列強に伍するため、鹿鳴館を中心に欧風主義が展開し、一方では急速な欧風化の反動として、国粹化の風潮も生まれていた時である。明治20年(1887)、人類学の父と言われた坪井正五郎は、わが国最初の風俗の路上観測を行い、「風俗漸化を計る简单法」という論文を発表した⁷。

坪井は「明治維新以来、西洋の文物がわが国に入り込むにしたがって、頭髮、衣服及び履物も西洋風に移ってきましたが、頭から足まで一時に変ずるのではなく、頭だけ西洋風にして他は日本風にしておく者もあり、頭と足とを西洋風にして着物は従前通りにしておく者もあり、これらの統計を作ったならば、風俗漸化の速力方向を知ることができる」と考え、風俗測定法を考案、風俗記号や風俗略号などのユニークな記号を用い記録した⁸。

明治20年の上野公園での風俗測定をはじめとするこれらの成果は、明治20年～22年にかけて、「風俗漸化を計る简单法」(「東京人類学会報告」第14号)、「中等以上の者900人の風俗を調べたる報告」(同16号)、「東京3ヶ所及び相模にて行いたる風俗測定」(同18号)、「風俗測定成績及び新案」(同28号)、「東京、西京及び高松における風俗測定の成績」(同35号)などに掲載された。

坪井の関心は、やがて人類学に移るため、風俗測定は短期間で終了するが、今から約120年前に、西洋化しつつある当時の風俗を記録し、定量的に把握しようとする路上観測が始まっていたという事実は高く評価すべきことであろう。

種	日	昭和4年	昭和5年	増減
男	総髪・総服・総履	361	48	+315
	髪・服・履	117	3	+114
	全風・西洋風	54	52	+2
	髪	136	106	30
	洋服	10	50	+40
	髪	65	54	+11
	西洋風	75	66	+9
	全風・日本風	71	64	+7
	髪・服・履	25	25	0
	髪・総服・総履	3	7	+4
女	全風・西洋風	3	8	+5
	髪	20	30	+10
	洋服	3	8	+5
	髪	6	15	+9
	西洋風	13	20	+7
	西洋風	13	20	+7
	西洋風	13	20	+7

風俗種目	風俗記号	風俗符	風俗略符
全体日本風	東東東(EDE)	1 1 1	0
髪のみ西洋風	西東東(WEE)	1 1 1	0
服のみ西洋風	東西東(EWE)	1 1 1	0
履物のみ西洋風	東東西(EEW)	1 1 1	0
髪と服と西洋風	西西東(WWE)	1 1 1	0
髪と履物と西洋風	西東西(WEW)	1 1 1	0
服と履物と西洋風	東西西(EWW)	1 1 1	0
全体西洋風	西西西(WWW)	1 1 1	0

図1 坪井正五郎の風俗測定
出典：日本色彩研究所「カラートレンドを探る ― 女性服装色30年の変遷」

2-2. 今和次郎による考現学

大正14年（1925）、今和次郎によって、初めて本格的な路上観測が始められる。今は東京美術学校を卒業後、早稲田大学の助手を経て教授となるが、民族学の泰斗・柳田國男の指導の下に古い民家に赴き「日本の民家」（1922）を刊行して高い評価を得る。ところが、大正12年（1923）に関東大震災が勃発し、東京が壊滅的な状態になると、美術学校の後輩の吉田謙吉と共に、焼け跡と復興の様子を記録して廻り、やがて、バラックや看板などに限らず、風俗にも関心が向けられ、服装や髪型にも対象を広げ調査を行った。

昭和2年（1927）には、これらの成果を「しらべもの（考現学）展」と題して新宿紀伊国屋書店の開店記念として開催、考現学の旗上げとなった。1930年には吉田との共著「モデルノロヂオ（考現学）」を刊行し、自らの研究手法をエスペラント語の「現代学 モデルノロヂオ（考現学= Modernologio）」と命名した⁹。

今は、古いものを科学的に観察する考古学に対して、現在の事象を科学的に検証する学問として考現学と名付けた。そして、関東大震災後、華美になりつつある東京の風俗を記録しておきたいと考え、それには人類学者が未開民族の研究に使っている手法を文明人にも適用して、現代人の無意識の行動や風俗の中に、現代人が抱く様々な問題を探求することを考えたのである。今は、この街頭風俗調査が、やがて流行学や社会心理学、美学に大いに寄与するとも考えていた。

ここで今の数多くの研究業績から、本論文の基底となる1925年の「東京銀座街風俗記録」の風俗調査¹⁰について考察してみる。今は、調査に当たり以下の規定を採用している。

1. 京橋から新橋までの間を調査期間とする
2. 歩道の上だけを調査の舞台とする
3. 主として西側を調査する
4. 調査区間を20分の速度で歩くこととし、その途上において前方より歩いてくる人のみを

調査の対象として、立ち止まる人、追越す人その他一切を調査に加えない

5. 採集カードには、調査事項の分類絵、日時、調査者の歩いた方向および調査担当者の名前を記入する

以上の手法は、現在の定点定時観測の基本的なパターンである。さらに調査項目は、歩く人の身分・職業、時刻による構成の変化、男女の年令比、和服と洋服の比率、男性服の色彩、着物と羽織の柄、履物、帽子など、全部で50項目に及ぶ詳細な項目となっている。

今によれば、「統計図表索引」の一隅に書きそえた数字は和服と洋服との比率を表している。(中略) 男性は洋服67に対して和服が33となった。これは各時刻を通して、1,180人を調べたものから比率を出したものである。(中略) 女の和服と洋服の割合は、(中略) 洋服は全体の約1%です。統計に出たこの数字にきつと誰でも疑いをもたれることと思いますが、幾度くりかえして見ても同じ関係に出ます。」などの記述がある。当時の銀座は、舶来専門店、洋装店、百貨店、新聞社、オフィスが立ち並び、モボ・モガが銀座通りを闊歩するわが国最先端の西洋化した街であったが、それでも女性の洋装は僅かであったという意外な事実が分かる。

今による社会現象の克明なる記録に基づく考現学は、吉田謙吉の女性の風俗、宇野久夫のヘアファッション調査、日本生活学会、現代風俗研究会、路上観察学会、アクロス編集室などの活動を生み出していくことを考えると、いかに意義深いものであるかが分かる。

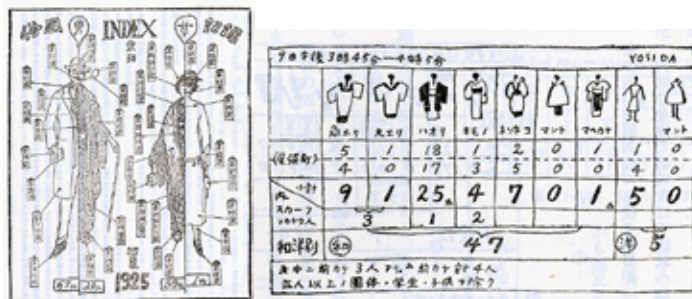


図2 今和次郎による銀座街頭風俗調査
出典：今和次郎・吉田謙吉「モデルノロデオ（考現学）」

2-3. 吉田謙吉による女性風俗研究

舞台装飾家の吉田謙吉は、今の考現学の手法を踏襲し、第二次世界大戦後の衣生活、住生活などの復興状況をつぶさに観測し、主に女性の服装や生活様式の中から、戦後10年間の様々な変遷を著作「女性の風俗」（1955）に記した。

吉田は「敗戦直後から十年目の今日にいたるまでの、街頭風俗の遷りかわりは、日本の風俗の流れ方を変えてしまった。それは、かつての関東大震災の直後からの、風俗復興の状態とは、

全く異なった流れ方だ。いやが応でも世界観的根拠の上に立たされて来たからだ。すなはち風俗の流れ方そのものが替えられてしまったのも、そのためだ。(中略)そこで、私はむしろつとめて敗戦風俗として、客観的にそれを観ることにして来た。それには、かつての関東大震災直後に、今和次郎先生と創めた考現学が、戦争中はもちろん手も足も出し得なかった状態から解放されて、再び役立つ事になった。」¹¹として、敗戦直後の女性の風俗を細かなスケッチと、服装の統計的な調査をもって実施したのである。



図3 吉田謙吉の女性の服装測定
出典：吉田謙吉「女性の風俗」

吉田は、これからの日本の服装がどういう方向に進んでいくかを見定めながら、一部の富裕層である特殊階級の服装の表面的な美化ではなく、一般の人々の服装において、進歩的な新しい美しさを創造してゆくことを良しとし、服装に対しての関心を深め、服装の民主化に対して活発な運動が展開されるべきことを願っていたのである。

2-4. 「衣がえの生態学調査」および「ヘアファッション調査」

1960年代に入ると、既制服の浸透により衣生活にも急激な変化が現れ、従来の決まり事や慣例が薄らいでくるようになる。この時期、注目すべき調査に安田武らによる「衣がえの生態的研究」(1966)がある¹²。この調査では、大阪駅前通勤の人たちを1年間カメラで写し、服装のパターン変化を調べた結果、現代の都市における衣がえは、暦によるものではなく、朝8時頃の気温によっておおむね決まるということを明らかにした。古来より四季に応じて衣服を替えていた習慣は、実情に合っていないことを考現学的により実証しており、我々の衣生活が、今まさに変わっていかうとする状況を明示したのである。

さらに1970年代は、従来の価値観と異なるファッション観が形成されるようになるが、このような中、近代美容の草分け的存在である美容家の宇野久夫は「ヘアファッションの流れと調査」(1977)という論文をまとめている¹³。ここで宇野は、今和次郎の考現学に触発されて、1970年代以降にどういう髪がファッションとして普及するかという観点から調査を試みた。宇野は、1975年春と1976年春の2回にわたり、全国8都市で女性の頭髮や衣服の調査を行い、ヘアファッションの流行の変遷、髪型と衣服の関係、髪型と年齢との関係を明らかにした。

2-5. 「日本生活学会」「現代風俗研究会」「路上観察学会」の活動

坪井、今、吉田らの取り組みはやがて、自国の生活や風俗を研究し記録しておくべきという必要性を喚起し、1970年代以降、学会や研究会による学究的な活動がさかんになる。以下の研究活動は、必ずしも路上観測という手法に限定したものではないが、現代の生活や風俗を学問的な対象として扱うことに広く関心がもたれたという点で、坪井や今らによる研究成果の延長上に位置するものと捉えることができる。

1972年、「日本生活学会」が今和次郎を初代会長として設立される。この背景には1970年に開催された大阪万国博覧会での、世界各国の科学、技術を始として風俗、生活、風習などが展覧されたことを受けて、今和次郎、梅棹忠夫、川添登などの研究者の間で、自国の生活や風俗を研究し記録する機関が必要との声が高まったことにある。今や梅棹らが目指したものは、従来、学問の対象とされていなかった生活そのものを対象化し、そこに人間の営みの本質を探ろうとする新しい学問体系の確立であった。

日本生活学会に続き、桑原武夫、多田道太郎、鶴見俊輔、橋本峰雄、井上忠司、山本朗などの学者を中心に、1976年に「現代風俗研究会」が発足した。初代会長を務めた桑原は、今和次郎の考現学の功績を十分に認めながら、惜しむらくは考現学が社会的広がりを持たないと指摘し、新しい運動を起こす時が来たと提言した。

桑原は「風俗ということ」(1977)という小論で次のように述べている¹⁴。

「学問は本質である。理論内容である。風俗などは冒涇であるとお考えの方がおりますが、あえて学問だけではなく、人間の文化にすべて「不易と流行」があるはずです。「永遠の相の下に」というだけのものを見る立場は堅実そうに見えますが、堅実すぎて化石になっているかもしれない。それでは学問ということが楽すぎます。流行はすなわち風俗です。学問も風俗として考えられる面がおおいにあるのです。」

桑原のこの理念に基づいて、同研究会は「現代（明治以降）風俗に関する理論的、歴史的の研究」を視点として、近代以降の風俗研究に多大の業績を残している。

さらに1986年、赤瀬川原平、藤森照信、荒俣宏、杉浦日向子らが中心となり「路上観察学会」が発足した¹⁵。このグループは、学会という名目を掲げてはいるが、学会的な運営がなされている訳ではない。だがしかし、この路上観察学会の着眼点は、世間の注目を浴び、1980年代以降の路上観察ブームの起爆剤になった。

彼らは、今和次郎の考現学を土台として、路上に隠れ潜む、通常は景観・美観と見なされない建物、看板、貼紙などを採集、博物誌的視点や見立てによって解読した。衣服に関しては、森伸之による「東京女子高制服図鑑」(1985)などが刊行されている。

3. マーケティング的な視点によるストリートファッション観測の系譜

3-1. 日本色彩研究所による色彩統計

戦後の混乱から脱しつつある1950年代初頭、統計学者や色彩学者が中心となり、路上に出現した婦人服装色を調査し、統計、記録する試みがなされた。調査の発端は、大阪の電気試験所の岡田喜義が、色彩感覚の数量化の目的から色彩の取扱も統計的な手法と考察によらなければならないとし、日本色彩研究所¹⁶の細野尚志を伴い、文部省統計数理研究所の林知己夫を訪ねたことに始まる。こうして「色彩統計研究グループ」が組織され、街頭の婦人服装の色彩調査を継続的に行うことが決定し、1953年から日本色彩研究所による銀座の路上観測による色彩調査が開始された¹⁷。

1950年代の初頭といえば、衣料品の統制撤廃、ナイロンの生産開始、洋裁学校の急増、ファッションデザイナーの活動開始、日本流行色協会発足などを背景として、日本のファッション産業の萌芽期でもあった。産業界では、色彩が流行を惹起する重要なキーワードとなり、次期の流行色への関心が高まっていた時期である。

日本色彩研究所による銀座街頭の婦人調査は、春夏秋冬の年4回、銀座6丁目の松屋前を調査地点としている。銀座4丁目方向から新橋方向に向かう推定15～59歳の通行女性をランダムサンプリングにより対象者を抽出、経験を積んだ専門家がトップとボトムの服装をJIS標準色票と照合し、視感測色によりマンセル記号で記録し、日本色彩研究所の定める調査用カラーコードの系統色名に変換し集計を行っている。

日本色彩研究所による服装色時系列測定の意義としては、1. ランダムサンプリングによる対象者の服装を、マンセル表色系に基づき集計を行い、客観的な色のデータを収集していること、2. 50年以上にもおよぶ定点観測を継続して行っており、長期的な時系列データを蓄積していること、3. 色の出現頻度を統計学的手法を用い分析することで、色の変遷に関する法則性が確認でき、予測の有力な武器になることなどが挙げられる。

これらの成果は、日本色彩研究所の機関誌「色彩研究」¹⁸に掲載されているほか、「カラートレンドを探る——女性服装色30年の変遷——」（1990）、「ファッションカラートレンド50年——女性服装色の定点観測調査——」（2007）としてまとめられ、半世紀以上にわたる、世界に類を見ない長期的な服装色の統計研究として貴重な資料となっている。

3-2. デザイナー箱守廣の「ファッション・アイ」

これまでに述べた調査は、研究者を中心とした路上観測の事例であるが、1970年代に入り、産業的な立場からストリート観測を開始したのがファッションデザイナーの箱守廣であった。箱守は、総合問屋の塚本商事(株)のファッション室長として、来シーズンのファッション予測と

企画・制作を担当していた。そこで箱守は、ストリート観測を、次に来るトレンドの予測資料として位置づけ、克明なリサーチを実践し、新しいトレンドの萌芽を探ろうと試みた。その動機を次のように述べている¹⁹。

「1970年夏、日本のファッション業界では、次のシーズンは“ミニかミディか、マキシか”と迷っていた。ニューヨークにファッション視察に出かけた折、ニューヨークのフィフス・アヴェニューを颯爽とホットパンツで歩く黒人女性を見て、私は何かに取り付かれたように、ストリートファッションを撮り始めた。(中略) 帰国してこのストリートファッションを分析したところ、ミニが60%、ミディが30%、噂のマキシが20%の結果となった。そこで私は報告会で、ミディやマキシは流行せず、ミニが相変わらず継続すると発表したのである。」

以来、箱守は、毎土曜日、原宿と銀座の街頭に立ち、調査は1987年まで継続された。箱守によるストリートファッションの記録は、1979年に「ファッション・アイ」として刊行され、1970年代ファッションの貴重な資料として、さらに1970年代に始まる消費者の意識変化を視覚的に記録した最初のマーケティング書籍と高い評価を受けた。箱守の視点は、アカデミックなアプローチとは異なり、ファッション・クリエーションの立場に立った極めて実践的で感覚的な記録であったが、これは今日のストリートファッションブームに帰結する、極めて革命的な試みであった。



図4 箱守廣によるストリートファッション観測
出典：鐵研新聞社「ファッション・アイ」

3-3. (株)パルコ・アクロス編集室による流行観測アクロス

西武セゾングループ傘下であった(株)パルコは、1977年にアクロス編集室を設立、「月刊アクロス」を発刊。1980年には渋谷、原宿、新宿の定点観測を実施し、同誌に連載を開始した。1989年6月号の同誌に定点観測の基本手法について次のように書かれている²⁰。

「アクロス」が始めた定点観測という活動には、今和次郎の「考現学」と呼ばれる社会学の中の1方法に基づいたものである。(中略) 今が「考現学」を始めた1920年代は、大震災を堺に東京府の人口が郊外化しながら膨張していた時期であった。1980年代もまた、東京が近郊へ「侵略」した時期である。都市が変動するときに、そのダイナミズムを的

確に把握する手段として「考現学」は有効なのである。(中略) こうして始まった「定点観測」の活動には、今が考える「考現学」の手法がフルに活かされている。今は通行人の特徴を克明にメモしたが、我われは毎回700枚以上の写真に残しながら観察する。今が昆虫学者の目で通行人を客観視したように、インタビューする人に対して、身長、体重、足のサイズから始まって、身につけているすべてのアイテムについて色・素材からブランド名、購入場所・年月まで、まるで採集した虫の観察記録を作るように細かく記録する。スタッフは今和次郎になった気分で、刻々と変化する東京の若者の生態を観察し、記録してきた。」

以後、アクロス編集室は、1980年代以降の定点観測の証人として、ファッションビジネス、マーケティング、広告関係など、幅広い分野に大きな影響を与えた。これらの成果は、「東京の若者 渋谷・新宿・原宿——定点観測の記録」(1989)、「STREET FASHION 1945-1995 若者スタイルの50年史」(1995)などに詳述され、「流行観測95-96」,「流行観測97-98」での流行論,「ヘタウマ世代」,「デジタル・ジェネレーション」などの世代論,「大阪の表現論」などの都市論などを次々に刊行し注目を集めた。「月刊アクロス」は、時代のニーズに合わせて1998年に休刊, 2000年よりウェブ・マガジン「web アクロス」として創刊され、今日までストリート・マーケティングという視点で定点観測を継続している。



図5 アクロス編集室による定点観測
出典：アクロス編集室「東京の若者」

3-4. (株)博報堂生活総合研究所のタウンウォッチングと「生活定点」

1895年創業の広告代理店である(株)博報堂は、1981年に基幹研究所として「博報堂生活総合研究所」を設立。以後、多様な生活者情報の収集と分析に当たっている。生活総研では、生活者情報の収集の手段として、「生活定点」という名目で調査を行い、タウンウォッチングを多用して、さまざまな生活者の意識調査を行っている。例えば、1985年刊行「タウンウォッチング——時代の「空気」を街から読む——」²¹では、街の変化がビジネスのヒントになるとして、街の構造論、記号論、経営論、時間論について詳述されている。

本稿では、ファッション観測の代表例として2005年に行なわれた「アニマルファッションの観察定量調査による東西着用率比較」について紹介する²²。調査概要は、東京の改札出口調

査、阪神は改札出口と電車内であり、結果は、「アニマルファッションは阪神圏の特徴という一般的な仮説は、見事にくつがえされ、東京圏で4.3%、阪神圏で3.5%という意外な結果となった」というものである。

このように大手企業傘下の調査機関による路上観測は、考現学を基底としながらも、今や吉田らが客観的に対象を捉えることを前提としていたのに対し、アクロス編集室や博報堂生

活総合研究所による路上観測は、マーケティングのための調査・研究であるという点が異なっている。そこでは、背後にある生活者のライフスタイルや価値観を読み解き、次の生活者意識を予測するための仮説を、路上観測により理論的に検証しようとする、新しい次元の路上観測に変容している。

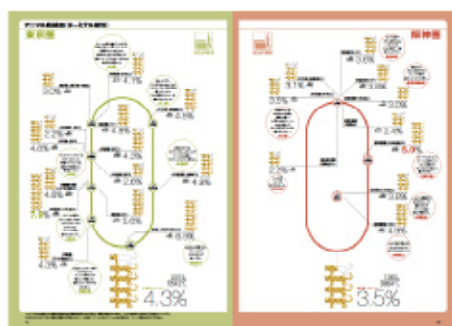


図6 博報堂生活総合研究所によるアニマルファッションの分析
出典：博報堂生活総合研究所「生活新聞」No. 413, 2005

4. ストリートファッション考現学の現在

4-1. アクチュアルな問題に対峙する方法論としての路上観測

これまで、ファッションをめぐる研究は、服飾史を軸とした研究と、民族学・民俗学による衣装の形態や製作技法等の研究を中心にすすめられることが多かった。これに対し、それまでの研究で顧みられることがなかったストリートファッションを研究対象とすることによって、ファッション研究に新たな展開がもたらされはじめています。

筆者らは、今による考現学やアクロスの定点観測、日本色彩研究所による服装色の実態調査などの業績に感化され、自分の価値観や感性を表現する発露であるファッション観測に注目し、1994年から調査を実施している。その方法は、東京都内のファッションストリートである原宿、渋谷、銀座、代官山の街頭で、各地点毎月1回、週末に定点観測を行い、通行人のファッションをランダムに写真に収めるという手法であり、1地点の1ヶ月の写真点数は約150枚、ほぼ300人のファッションを記録している。これらをもとに、エリア別のファッションの傾向、被写体のクラスターの特性、服装色の傾向などを分析し、その一部をホームページで公開している。研究対象は単にストリートに現れるファッションの変化のみならず、ショップや街の形成、雑誌やインターネットなどのメディアとファッションの関連性などにも関心を広げ、その成果を発表してきた²³。ファッションが街を介在として、この現前で、ありありと変容している、その渦中に身を置きながら、アクチュアルな対象を調査研究することの重要性を肌で実感している。と同時に、今から数年、数十年経ても、歴史的な記述として意味をもつものになる

ことを願っている。

現在、こうした考現学的な手法は、吉見俊哉・若林幹夫らによる著書「東京スタディーズ」(2005)など、都市空間、メディア、大衆文学などを社会的に捉えようとする研究者たちによって見直されつつあり、通常の研究や論文のスタイルに限定されない、都市や現代の社会に対する複数の視点やアプローチからみた論考の必要性が求められている。

4-2. ストリートファッション雑誌におけるファッション情報

1990年代以降になって、ファッションのカジュアル化、多様化が進行すると、従来の雑誌が果たしてきた役割と異なる、ストリート系雑誌の創刊が目立つようになった。ストリート系雑誌とは、路上観察を編集方針の中心に置き、街角や路上に見られるファッション、ショップ、レジャースポットを紹介することを主眼とした新しいタイプの雑誌である。

こうした雑誌が登場してきた背景には、1. 1989年の渋谷カジファッション²⁴を契機として、ヤングファッションがファッションのリーダーとなったこと。2. 従来のトップダウン的なトレンド波及とは異なる、ストリート発の新しいトレンドが次の新しい流行を生み出すという状況になったこと。3. 若者たちによるストリートファッションのライフスタイルが、より年齢の高い層のライフスタイルにも大きな影響を与えたこと。などがあげられる。

1995年創刊の「GET ON」、 「クールトランス」など、若い男性をターゲットとした雑誌を端緒とし、1996年の「Spring」、 「Cawaii!」、1997年の「FRUiTS」、1998年の「東京ストリートニュース」、 「KERA」、2000年の「mini」、 「S-Cawaii!」、 「Ego*system」など、列挙すればきりが無いが、その数は10代～20代の女性をターゲットとしたファッション誌がおおよそ80誌ある中の約35%を占めている。この中には、「fashion-memo」や「street」、 「東京グラフィティ」のように、ページの大半が街頭スナップによる、いわば全て路上観察による100%ストリートファッションのみの雑誌も存在している。

前述したように1970年代、ファッションデザイナーの箱守廣は、ストリートファッションを撮影するという孤独な営みを続けてきた。だが、現在では数多くのマスメディアが、このストリートファッションを紹介するという路上観察を行っている。しかも、現在ではストリートファッションの体現者が、瞬時に雑誌モデルとして登場し、自分がそのモデルを観察する状況を生み出している。いわば、路上観察の観察者と非観察者との境界が消滅して、複層した路上観察のスタイルに変容しているのである。

4-3. ウェブにおけるストリートファッションサイト

1990年代の半ば以降は、インターネットという新しいメディアが普及したときである。

様々なサイトが登場するなかで、ストリートを観測・紹介するホームページも出現した。

現在、継続して定期的に更新されているサイトを挙げると、本論冒頭でも述べた、筆者らによる「ストリートファッションレポート」をはじめ、各種団体、マーケティングの調査会社、雑誌の出版社等が運営しているもののほか、個人によるサイトも多い²⁵。

こうしたホームページは、海外からのアクセスも多く、マンガやアニメ、コスプレやビジュアル系バンドなどと並んで、日本のストリートファッションが「ジャパン・クール」の関心対象として、海外から大きな注目を集める契機となっており、日本のストリートファッション動向が、海外のファッション・トレンドを牽引するケースも広まってきている。

このようなウェブで展開される路上観察は、雑誌と同様に観察者と非観察者の境界を取り外すだけでなく、その路上観察がグローバル規模で展開するという、新しい次元に入りつつあることを現している。

5. ま と め

本稿では、わが国の社会現象の一つである風俗調査のなかでも、街頭における服装調査、すなわち、ストリートファッション観測がどのようなアプローチにより行われてきたか、特に、これまであまり言及されてこなかった1980年代以降の系譜をたどり、路上観測の考察を行った。

最後にこのような路上観測は、いかなる時に盛んになるのかを考えると、次のようなターニングポイントの時と重なっていることが分かる。

1. 社会や文化の仕組みや担い手が変わるとき
2. 消費や流通の仕組みや担い手が変わるとき
3. メディアや流行の仕組みや担い手が変わるとき

まず、1. の社会や文化の仕組みや担い手が変わるときでは、坪井正五郎による明治維新後の生活様式が和風から洋風への移り変わりの状況が調査され、さらに関東大震災後の今和次郎の考現学、そして第二次世界大戦後の吉田謙吉の女性の風俗研究などが進められたように、大きな社会変動の後の文化の変容を、路上観測を通じて記録すべきとの気運が高まり、学術的な調査対象として服装の変化が捉えられた。あるいは、1960年代の安田らによる衣がえの生態的研究のように、古来の風習が実情に合わなくなりつつある時に、その実体を把握して記録しておこうという試みがなされることが多い。

次に2. の消費や流通の仕組みや担い手が変わるときのケースを考えると、1960年代以降の高度経済成長期を迎え、大量生産・大量消費型の生活となり、既製服が浸透するようになると、今度は効率的な製造・販売を行うためのマーケティング的視点による予測としての街頭調

査が盛んとなった。学術的な関心と産業のための予測的な目的の双方を意図した1953年に始まる日本色彩研究所による調査、そしてデザイナー箱守廣による1970年代のストリートファッション調査、1980年代のパルコによる定点観測などのマーケティング的な目的による服装観測が行われるようになった。

さらに3. のメディアや流行の仕組みや担い手が変わるときのケースでは、1990年代以降に創刊が相次いだストリートファッション雑誌におけるストリートスナップの特集や、ストリートファッションを紹介するホームページの増加が挙げられる。

ファッションを提示する媒体は、コレクションやブランドが提案する流行を伝える従来のファッション雑誌から、読者と等身大の被写体たちを掲載したストリート雑誌やインターネットによるストリートファッションサイトに関心が移っている。ここでは、流行の方向性はトップダウン的な流れではなく、逆にストリートから生まれる流れが生じ、流行そのものが変容している。こうしたメディアや流行の変化を定点観測によって捉えていく試みは、それまでの研究で顧みられることがなかったストリートファッションを研究対象とするカルチュラル・スタディーズの動きや、産業界におけるマーケティング的な視点から行われているもの、ストリートファッション雑誌がストリートファッションの中から新しいファッションを提案するための取材対象として、あるいはサイトの運営者の個人的な関心事を集めたものなど、目的や手法も多種多様となり現在に至っている。

かつて、今和次郎は人類の現在を知る手立てとして考現学を提唱し、その一方法として路上観測を実施した。ただし、現在、展開されている雑誌やウェブによる路上観測は、その行為を通して、即座に次世代の人々の現在を創造するインキュベータ的な役割をも担いつつあると思われる。「路上観測」も新しい時代を迎えている。

註

- 1 共立女子短期大学カラー&デザイン研究室，ストリートファッションレポート，<http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/nyusi/street/>
- 2 今和次郎，「考古学入門」，ちくま文庫，1987
- 3 井上忠司，定点観測の方法，「現代風俗'77」，現代風俗研究会編，1977
- 4 日本生活学会，「衣と風俗の100年」，1995
- 5 鶴飼正樹・永井良和，風俗を調べる ― マニュアルをこえて，自分の方法をつくるために，「風俗研究の方法」，現代風俗研究会編，2000
- 6 池井望，流行研究の方法，「現代風俗'78」，現代風俗研究会編，1978
- 7 坪井正五郎，風俗漸化を計る簡単法，「東京人類学会報告」，第14号，1987
- 8 井上忠司，前掲書

- 9 今和次郎・吉田謙吉,「モデルノロジオ (考現学)」, 学陽書房, 1986
- 10 今和次郎・吉田謙吉, 前掲書
- 11 吉田謙吉,「女性の風俗」, 河出新書, 1955
- 12 安田武・山階克子, 衣がえの生態的研究,「武庫川女子大学紀要」自然科学編, 1966
- 13 宇野久夫, ヘアファッションの流れと調査,「現代風俗'77」, 現代風俗研究会編, 1977
- 14 桑原武夫, 風俗とは何か,「現代風俗'77」, 現代風俗研究会編, 1977
- 15 赤瀬川原平・藤森照信・南伸坊共編,「路上観察学入門」, ちくま文庫, 1993
- 16 日本色彩研究所は, 昭和2年(1927)に画家の和田三造らにより日本標準協会として設立され, 昭和20年(1945)に財団法人日本色彩研究所に改組。日本で唯一の色彩に関する公益法人としての民間学術研究機関である。
- 17 色彩統計研究グループ, 色彩統計の研究,「色彩研究」1-1, 1954
- 18 「色彩研究」に掲載された女性服装色に関する主な報告に, 銀座街頭における婦人服装の色彩調査,「色彩研究」15-2, 1968, 婦人服装色15年間の変遷——主成分分析による系統色名圏別の出現傾向の検討——,「色彩研究」15-2, 1968, 銀座街頭における婦人服装色実態調査(1981年~1982年),「色彩研究」32-2, 1985, 銀座街頭における女性服装色実態調査(1993年~1997年),「色彩研究」44-1, 1997, 銀座街頭における女性服装色実態調査(1997年~2003年),「色彩研究」50-1, 2003などがある。
- 19 箱守廣,「ファッション・アイ」, 織研新聞社, 1979
- 20 アクロス編集室, 定点観測とはなにか,「月刊アクロス」, 1989年6月
- 21 博報堂生活総合研究所編,「タウンウォッチング 時代の「空気」を街から読む」, P H P出版, 1985
- 22 博報堂生活総合研究所,「アニマルファッションの観察定量調査による東西着用率比較」, 2005
- 23 筆者らのストリートファッションに関する研究成果として, 著書「ストリートファッションの時代」明現社, 2005, 主な論文にファッションを伝播させる雑誌メディアの変容,「デザイン理論」50, 2007, セレクトショップとストリートファッションの多様化に関する一考察,「ファッションビジネス学会論文誌」Vol.12, 2007, ストリートファッションにおける女性服装色の変遷に関する研究(1)——同調色と相反色および循環性に関する考察——,「日本色彩学会誌」Vol.31, No.1, 2007などがある。
- 24 渋谷カジとは「渋谷カジュアル」の略で, 1989年頃, 渋谷のセンター街周辺に集まる大学生や高校生達から発信されたファッションのこと。Tシャツやポロシャツ, ジーンズ, 紺のブレザーなど, 単品アイテムのコーディネートが特徴。DCブランドに代表されるトータルルックとは異なる渋谷カジの登場により, ファッションのカジュアル化, 低年齢化が進んだ。
- 25 代表的なものに(株)パルコ・アクロス編集室による「web アクロス」, (財)日本ファッション協会運営による「東京ストリートスタイル」, (有)東京デザインオフィス運営による「渋谷電脳リサーチ」, (株)アパレル・ウェブ運営による「ストリートファッションフォト」, (株)オリンパスシステムズ運営の「ファッションサーチマガジン アール・アン」, (株)ディーエヌエー運営による「ネッシー」掲載の「ファッションリサーチマップ」などが知られている。

